

## 境界例治療と「水の夢」、共同連想治療と低負荷質問

平井孝男

平井クリニック

### 要約

硬いが脆いペルソナを持った30歳女性境界例事例の治療経過を報告する。治療の転回点になったのは六つの水の夢と告白であった。基本的信頼関係の無さ、性的外傷体験、自傷行為、失恋体験の後、うつ状態を発症。各精神科医療やカウンセリングやCBTを受けるも改善せず筆者の下で2年余りの心理療法と12年間の診療を受ける。当初は想像力の不足、心の閉鎖、情報不足、陰性感情の放出で悩まされたが、低負荷質問（ふわり質問、羽衣質問、選択肢型質問）や行動記録により、6つの水の夢（水溜りの夢、砂漠で渴きに襲われる夢、木々々水浴び恐怖の夢、水源探求の夢、アマゾン軍団と溺れる夢、亀に助けられる夢）の報告と告白が成される。その後結婚・出産が成される。面接では「波長合わせと共同作業」、夢解釈では共同連想治療が役に立ち、クライアアントの想像力の開発と自己実現が少しは成されたと考えられる。

キーワード：境界例治療、水の夢、共同連想

### ABSTRACT

Psychotherapy of Borderline Case and Dream of Water, Mutual Association and Soft Question

HIRAI, Takao

Hirai Clinique

In the psychotherapy of this borderline case whose Persona is hard but fragile, the turning point was 6-dream series about water (pool, desert, river, amazon, turtle, cross) and a confession of sexual abuse. After some other forms of therapies, this psychotherapy lasted for two years. The therapy was often disrupted by a lack of imagination. Therefore, the therapist used the questions with little charge, so-called "FUWARI questions", "HAGOROMO questions", and closed questions. Through soft questions, imagination develops, and it enabled the six very important dreams to appear. Between the client and therapist, mutual associations produced more imaginations which has led to the sexual abuse confession. Striving through these phases, client seemed to succeed in going forward to her self-realization, at least to some extent.

Key Words: psychotherapy of borderline, dreams of water, mutual association

### 1 初めに

境界例治療は想像力の乏しさ（Schwartz-Salant, 1989/1997）や不適切な用い方（織田, 2017）、対話困難、魂の荒涼さ・乾き等困難に満ちている。本例でも行き詰まりにすぐ陥った

が、水の夢 (Bachelard, 1942/1969) と壮絶な告白体験を通して治療は好転した。ここでは、

ユング達の、水や水の夢への見解に触れた後、事例を12期に区分して報告、考察する。

## 2 水と水の夢について (ユングやユング派の見解)

水は「ユング自伝」(Jung, 1961) に記されているように、ユングにとって必要で大事なことであった。ユングは水が、再生、夜の航海、無意識、霊等の象徴であるとし (Jung, 1911-12/1985)、さらに「水は万物の溶剤であり石や金属の形を取る時は溶解され、大気 (プネウマ、精霊) へと変容される」(Jung, 1944/1976) としている。また、原子 (アトム) が、丸い基本物質で、それは四者構造 (地水火風) を持っており、それらが宇宙や世界靈魂と同一であると示し、水の基本的原初性を示している (Jung, 1951/1990)。この点でユングの考えは、華嚴經 (高楠, 1988) にある「一—微塵中、仏国在安住」「一即多、多即一」と通じる。ユング最後

の大著である『結合の神秘』(Jung, 1955-56/1995・2000) では、永遠の水、恩寵の水、救済の水、教義の水、黄金の水、原初の水、至福の水、神聖なる水等に関する記述が見られ、これまでの水に関するユングの連想や考えが総纏りになっている。水は心の道標、魂の導き手である。Hark (1992) も「夢に出てくる水は多くの場合魂が動く事を生き生きとし始める事の表現」と言うように、治療には大切なものであり、Anderten (1986/1992) も「心の病に悩む人は夢の中で水に飛び込んだり水の中で移動したり水に支えられていると感じる事を学ばなければない」と夢の中での水体験が生かされることを重視する。

## 3 事例報告

水と同様、夢は捉え難く表現や連想が容易でないこともある。「狂気とは想像力の無さである」と言われるように、追いつめられているクライアント、特に境界例にあつては、この表現力、想像力が乏しくなっており、夢が捉えられなかつたり、また連想が困難なことが多い。筆者はこれに対し、共同連想治療という形でクライアントと共に夢の探究と治療に取り組んだ。面接の基本として「低負荷質問」を用いた。本事例は話し言葉に近い文体を用いて記載した箇所もあるが、筆者にとつては自然な文体をあえて用いることによつて、臨場感を温存し伝えたいという意図によるものである。筆者の個々の治療対応は一般原則として主張している訳ではなく、それぞれ本事例に即して考察・提言したものである。

**【A事例の概要】** (筆者 (以下、セラピストとする) と出会うまで)

初診30歳独身女性。訴えは不眠、極度の疲労感、不食と過食、自傷行為、無気力、欠勤、抑うつ感、希死念慮。薬で睡眠は少し改善するも抑うつ気分、希死念慮は頑固に続く。他院での治療も奏功せず。認知行動療法、カウンセリングもすぐに中断。カウンセラーに焦りすぎ、我儘、感謝の気持ちが届かないと言われ、悲しみと怒りで花瓶を投げつけ大泣き。他の治療機関でもトラブル続きで早期中断。占いも効果無し。その後セラピストの元に来院。

### 【成育歴】

一人娘。両親は熱心な研究者。愛情を感じられず育つが、ピアノと英語は熱心に教育される。小学生の時慕っていた叔父から性的外傷。以後、内気で人との付き合いは消極的になる。美貌で

あったが、特に男性を選じた。大卒後会社勤務3年目で抑うつ状態に陥る。

#### 【現病歴と治療歴】

中学ころより、拒食と過食、自傷行為があり、大学中から希死念慮が強まってきた。就職後、暗い気持ちであったが、仕事は真面目に取り組んでいた。就職3年目で二度の失恋と仕事のストレスで、重度のうつ状態に陥り、4、5人の治療者に精神科薬物療法、精神療法、カウンセリング、CBTを受けるが改善せず、治療者や心理療法に不信感を募らせた。セラピストの本を見て、X年6月来院する。

#### 【第一期、1～3回、初診と治療契約】(X年6～7月)

話を聞いたセラピストは、鬱の強い境界例と見立て。治療目標を聞か「何を求めているのかわからない」とのことで、「真の目標を見つけることを治療目標にし、それまでは少しでも楽になる、生きやすくなる」というところに着いた。続いて治療は共同作業ということをし提示すると、反発が強いが納得する。治療中の自傷他害行為の禁止、ルール遵守は「とても無理」とのこと。ただ、「感情や行動のコントロールができる」には合意。その他、治療場面で会わない、電話での診察の禁止もかなりの抵抗を示したが合意、緊急時の対応についても話し合っておいた。薬はリーマスがかろうじてましとこのことで、診察と服薬は続け、対面法の面接治療、カウンセリング(筆者がセラピストとして担当)も併用(50分、週一回を原則)で合意した。

#### 【第二期、4～16回、不満の洪水、低負荷質問、大量服薬と行動記録】(X年7～11月)

面接では苦しさ、イライラ、怒り、不安、絶望感、困惑等に終始した。セラピストがその原因を共同探求すると、今までの治療者達に傷つけられたこと、上司・同僚からのバワハラの訴

えが強く、他責的傾向が目立った。投影同一視(神秘的融即)(Schwartz-Salant, 1989/1997)による攻撃的言動も強い。その内にAの不満はセラピストに向けられ、「先生も今までの治療者と同じように何もしてくれない」という不満噴出。不満の原因と対策を共に考えると、「セラピストが悪くて、真の楽や自分の希望を聞かれなくてもわからない」とのこと。対話が困難で、セラピストの質問には「質問攻めにしないで」と反発強し。ただ沈黙しているとAは「私を厄介者と思って放り出したのでは。先生が黙っていてどうするの!」と挑戦的に向かってくる。セラピストは、低負荷質問(ふわり質問、羽衣質問、選択肢型質問)(平井, 2008)という形で、傷ついているAにそっと寄り添うようにすると攻撃は少しくなる。しかし、生育史・感情の歴史を聞くと、「質問責めは苦しい」とのことで、特に異性関係のことに關しては口を閉ざしたままであった。セラピストは波長合わせ(平井, 2014)を考え、無理にそれを聞こうとしなかったが、治療は堂々巡りで進展のない中でAは大量服薬する。「治療が全く進まず苦さが頂点に達したから」とのこと、ただ「自傷行為はもうしたくない」とのことで、そのコントロールのため、行動記録を採用、以後自傷行為は減るも苦しさは同じ程度に続いた。

#### 【第三期、17～24回、夢導入の準備段階】(X年12月～X+1年1月)

「底なし沼に落ちていく」夢を見たセラピストは行き詰まりを打開するため、夢の導入を提案するも「夢なんて役に立つのか? それに私、夢なんて全然見ない」と拒否的であったので良くなった例を話すと、Aは少し興味を示した。そして、夢見の準備作業として、夢を見たら○、見なかったら×、見たかどうかわからなかったら△とする夢行動記録をつけさせた。最初は×や△で後に○が多くなったが、夢の内容を思い出すことはできなかった。

【第四期、25～35回、六つの夢の報告】(X  
+1年2～5月)

(第一の夢、水溜りの夢)この試みを続ける中、Aは「何か水溜りがあった」という夢を報告。連想は全く湧かないとのことであった。セラピストがユングを真似て、〈もし水というものを含く知らない人に水を説明するとしたらどうしますか〉と聞くと「何を馬鹿なこと言うのか。水なんて当たり前すぎて説明のしようがない」と一蹴された。しかし、セラピストの連想を聞きたいと言っているので、①生命力が少しでも湧いている、②水の流れが溜まっているので心の流れが滞っている、③水商売というように水はお金を表すが少ななので心配している、④涙の雨が水溜りになっている、等色々浮かんでくるが、どうか)と聞くと、Aはこんなに水から色々連想ができるんだと感心したが、自分の感想は「どれも当たっているし皆違うような気がする」とのことであった。

(第二の夢、砂漠の夢)次の夢は「飛行機に乗っているが、事故が起き、砂漠に激突するよるうに墜落する。でも自分だけが助かっている。はっとしたが間もなく猛烈に喉が渴いてくる。遠くで隊商の行列が通っているようだが、こちらに近づいてくれるのかどうか、とても不安」で、連想は「とても嫌な感じ。折角助かったのに渴き死にするなんて」というので尤もだと同じ意する。あとは、何故こんな夢が出てくるのかは「全くわからない」とのこと。共同連想をすると、「やはり何か求めているのかしら。でも水を求めているのではない。どこにでもあるものなのに」ということであった。ただ彼女は夢の不思議さに驚いていた。

(第三の夢、木々と水浴びの恐怖)これは「誰かに追放されたようだが、気がつくとも木々が立ち並んでいる緑の草原にいる。素晴らしく奇麗な所で、暫く跳びはねたり散歩していたら少し大きめの川に出会った。ゆっくりとした流れで突然水浴びしたくなり、足を一步入れるがいきなり恐怖が襲って来て足を引いてしまふ」という

ものであった。共同連想すると、「追放されたというのは、今の社会に受け入れられていない自分のこと。ただ緑や木々は生き生きしていてこんな所があるといいなと思う。でも水に入るのは怖い。裸になったり溺れるのを恐れているのか」ということであった。

(第四の夢、水源探求)第三の夢を見た後、「怖がり過ぎているからいけない」と思い、同僚や上司に批判めいたことを言ったり、自己主張したところ、Aの願いが聞き入れられて少し満足気であった。第四の夢は、「やはり大きな河のほとりにいる。何か上流の方で声があったように思えて水源を探ろうとして河岸を廻る。ただ行けども行けども辿り着けずに焦っている」とのこと。共同連想で「私は何かを探している。水とこの生命力の源を探っていくのか、自分自身を探求かもしれない。ただ辿り着けない運命にあるのだろうか」とのこと。〈でも黙々と歩くことに意義があるのでは〉と返すと、「そんな風にはいい方に考えられたいけれど」とのこと。〈確かに追い詰められていると、いい方の考えは出ませんね〉と同意しておいた。

(第五の夢、アマゾネス軍団と溺れる夢、自殺未遂)次に「海岸でぼーっと佇んでいると、海からある一群が現れる。馬に乗った長身でモデルのような美女達が武装してこちらへやってくる。アマゾネスの軍団だと思ふ。怖くなったが、隊長にお前も一団に入れと言われ、馬に乗らされる。でも馬に上手く乗れず必死になってついていくが乗りこなせず、馬に大きく跳ねられ、海に投げ出され溺れそうになるが、何とか必死に海岸に向かつて泳いでいる」と言う。この夢を見た後、凄しいショックと悲しみに襲われ、10階のマンションのペランダの柵を越えて飛び降りようとしたが、治療の約束を思い出し「何とか踏みとどまった」と言う。驚いて事情を聞くと「映画で見たアマゾネスを思い出した。皆素晴らしい美貌で180cmの長身スーパーモデル。しかも強いし、それだけでなく映画では結婚もし子供も作っている。私はずっと憧れていたの

だと思う。そんなアマゾンネスの一員になれたのに、馬にも乗れずに脱落して死にそうになる。結局私のような貧弱な者では到底そこに入ることはできず、何の望みもないと思死のうとした。今も死にたい気持ちには変わらぬ」とのことであつた。セラピストは何とも言えない気持ちにさせられた。実際の彼女は162～163センチの美人で、こんな劣等感を持っていたのかということや、順調と思えた夢分析経過での、予想外の自殺衝動の出現に、安易な夢治療を出した後悔を感じた。Aに〈貴女の苦しみに気づけずしに申し訳なかった。でも生きていて本当に良かった。ここまで二人でやってきたので貴女に死なれると僕は辛いし寂しいし罪の意識を抱いてしまう〉という逆転移丸出しの言葉を出し、そして暫く夢を報告することはしないように、と言っておく。Aも申し訳なさそうに「すみません。先生がそんなに傷つくなんて思ってもいなかった」と述べた。

(第六の夢、小亀を助け、大亀に乗り対岸まで近づくと夢) 夢の報告を禁止したにもかかわらず、是非聞いて欲しいと、次の夢「大きな河が滔々と流れ河岸に佇んでいる。今度も上流を上っていくが、いくら遡っても、河幅は広いままである。その内向こう岸に何かがあり楽園のような感じがする。でもこんな広い河は渡れないと思う。すると小亀が枝に挟まって苦しんでいる。思わず亀を助けて河に放してやると、嬉しそうに泳いでいる。すると今度は水の中から巨大な海亀が現れる。何気なく乗ってしまうと、向こう岸に向かって泳ぎ出す。ただ途中で揺れたため、不安と後悔を感じたが、対岸が見え、もう少し頑張ろうと思う。があと少しのところまで目が覚めた」というものであった。共同連想で「水源を求めていったのは、自分の心の中身を知りたい気持ち。対岸に私の真に求めているものがあると思うが、到底渡れそうにない。またしてもあきらめざるを得ないと思っている」と小亀に出会う。この苦しんでいる小亀は私か私の分身で、色んなしがらみや雑念にとらわれて

いるのだろう。助けたのは、もっと自分を大切にしなければという思い。海亀は少し成長した自分。対岸に着くまでに目が覚めた、求めているものはまだ早いということ」。第五の夢で危険な所に引張り張られたので、〈川に落とされずに済んだのはいいし、大亀という助け舟があるのはいい〉と返す。

### 【第五期、36～39回、言うか言わないかという時期】(X+1年6～7月)

この後Aはほっとすると同時に、「こんな夢を見ることや、これほど色んな連想に出会うのも初めて、でも夢って怖い面もある」と言う。自殺未遂のことも念頭に置きながら〈どこが怖いか聞いた方がいいですかねえ……〉とふわり質問を投げかけると沈黙のまま。〈そんなに大変なら答えなくていいですよ〉と返す。その後、「実は言いたくはないけど言わずにはおれない話がある」と言う。それで羽衣が触れるような感じで、〈言うか言わないかは迷いますよよね。どちらにしても大変ですよね〉と言うと頷く。〈どういふ点で迷うのか聞く方がいいのかどうか……〉と本人の方を見ずに超越者に独り言でも言うように羽衣質問を投げる。Aは、少し安心しているような、相変わらず苦しんでいるような感じである。その後迷いの中で苦しんでいる様子であった。そして、「思い切って言います」と述べた時、セラピストは、これで核心がわかると思うと同時に、告白した後の本人の気持ちや危険な事態の招来を心配したので、〈秘密を守れないで言ってしまうのは危険ですよ。ゆっくり考えたら〉とむしろ性急な告白を止める方向に動いた。さらに秘密を言う場合の三原則、即ち①熱心に傾聴する理解者、②秘密保持、③秘密を本人のために使ってくれる人の存在が必要と伝えた。その後も迷いは相変わらず続いた。言わないと苦しいと思う気持ちと、言ったら大変なことになると言い続ける。そこで、〈言った場合と言わない場合の最良の結果と最悪の結果は〉(最悪の結果を防止する適切な方法は)

〈最悪の結果が出た場合の適切な対処〉との6質問を投げかけた。ただ、こうした問題は到底一人では考えられないので、一緒に考えていたところ、一番恐れられていることは、セラピストに軽蔑され放り出されることであつた。大丈夫、そんなことにはならないから、と言いたかったが、それは絶対の保証にはならないと思ひ、〈多分そんなことにはならないと思うけど迷うよね〉(言うのは辛い。しかし黙っていても辛い。でもどちらの辛さをとるかをしつと考えていることで、強さ、アマゾンネスのような外面的強さでなく、内面的な心の強さが育つと思ふよ)と言った。そして、ついに告白が始まつた。

#### 【第六期、40～43回、隠されていた物語】(X+1年8～9月)

Aの告白の要約。父は大学教授、母は高校教師、Aは遅く生まれた一人っ子。両親とも仕事に忙しく父母の記憶は無いが、遊んでくれず、父によく殴られたとのこと、母はそんな父から自分を守ってくれなかつた。Aは両親が高齢出産で思いがけず妊娠した結果の「要らない子」という感じを持たされていた。ただ、ピアノや英語を習わせることには熱心であつた。本人は幼稚園へ行っても適応できず、辛い思い出しか無い。唯一仲良くしていたのは叔父で、よく遊んだり本を読んでもらったり色んな所へ連れて行ってくれたりした。しかし、本人が10歳の時大変な悲劇が起きた。それは、叔父と遊んでいる時、服を脱がされ性器を触られたり舐められたり、相手の性器を吸わされたり精液を飲まれたりというこつであつた。本人は何が起きたかよく覚えていないようだったが、大変なことをされたと思ひ、それから叔父と会うことを敬遠し、叔父も遠ざかつていった。その後、性に関する本を読んで、自分がとんでもないことをされたことがわかり、自分が非常に穢れた存在だと思つた。これまで信頼していた叔父にそんなことをされ、一挙に男性不信・人間不信になつた。その時まで内気で引きこもりがちであつ

たAは一層暗くなり、学校へも行くのが嫌になり、自室に籠つてしまつたが、両親からすぐ怒られるので、仕方なしに行つていた。母にこのことを言おうと思つたが、強く叱責されるのが落ちなので黙つていた。その後、中学に進むも男性への嫌悪や拒否が強く、中高でも男子生徒との接触を避けていた。女友達は少しはいたが、なるべく派手な子との付き合いは避け、男性の話題に関しては全く興味のないように振舞つていた。ただ、勉強、特に英語が良く出来たので、それとピアノに集中することで毎日やり過ごした。でも時々ひどく苦しくなつたりイライラしたり、生きていても仕方がないと思つたりすることがあるので、そんな時は手首や太腿を切つたり、過食をしたりしていった。しかし、絶対に親にはばれないように、切るのは薄くし、過食も親にわからないよう隠れてしていた。女子大英文科に進んだ後、他の友人が男性との交際や性のことを話題にするのをなるべく聞かないようにして、ひたすら勉強に集中していた。卒業後は大学院を希望したが、親の反対で有名商社会社に就職した。なお、女子大でも苦しさは同じで、希死念慮、自傷行為を繰り返していた。就職後、男性社員との接触はあつたが、仕事だけの話題に制限した。内心では恋人が欲しい気持ちが芽生えるが、思うだけで身震いし、そんな気持ちには隠れていた。そんな時、同じ職場で好きな男性が出来た。その彼は自分に時々話しかけてくれたり、仕事上の助言もくれたりした。好男子で感じが良く、性的な匂いのしない人なので、本人は絶えず彼や彼と対話して過ごす場面を空想しており、自分を好きに違いない、いつかデートの誘いがあると思ひこんでいたところ、彼が別の奇麗な女性と楽しそうに歩いているのを見て、ひどく落ち込んだ。この秘密をAに親切な女友達に打ち明けたところ、彼女はAにもつと積極的に行くようにと助言、そんなものかと思つていて、今度は取引先に好きな男性ができ、思い切つて「付き合ってください」と言うと言つた相手にはいきなりのことなの

言うとな納得してくれた。

**【第八期、51～67回、その後の動き、ついに男性と交際開始】(X+2年1～4月)**

セラピストに秘密を維持することの大事さと、そのためにも秘密を共有することの必要性を保証してもらった後、告白の衝撃は徐々に収まり、少し落ち着いていた日々が過ぎ、「こんなにゆったりしてすっとした日を過ごせるのは初めて。やっぱり生きていて良かったのかしら」と述懐。その後、同じ職場に好きな人が出来たとのこと。どうするのが最適か慎重に共同探求したところ、なるべく傷つきが少ないように接近したいとのこと、視線合わせ、微笑み交わし、社員食堂での同席、会話の進展、音楽会に二人で行くといった、二人だけの交際が発展することになった。本人は夢だけでなくこういう現実の行動でも想像力が開発されたようだった。

**【第九期、68～81回、性への恐怖とその対応。結婚】(X+2年5～8月)**

二人の交際は順調に進み、結婚の話になったが、突然強烈な性交渉恐怖に襲われた。深刻な性的外傷体験を受けた彼女にとっては当然のことである。これに対しても最良の方法を共同探求したところ、彼に少しかだけ伝えるのがいいとのこととでそうすると、彼はあっさり「何となくそれに気づいていた。セックスが無理なら、無しでの結婚生活でも全然かまわないよ」という答えであり、Aはすごく安心した。その安心のせい、彼と着衣での抱擁を重ねている内に、女性器のほてり・愛液も実感した。初夜も無事にすみ、セックスの素晴らしさに感激しており、彼女は「夢で対岸に行けなかったが現実には迎り着いた。大きな海亀は先生(セラピスト)のこと、途中からは自分で泳いで行きなさい、というメッセージだったと思う」と述べた。

で断られた。Aはこの二度の失態で落ち込み、男性とは縁がない、私は穢れきっているからと思いい、一生仕事に打ち込もうと決心したが、丁度後輩の教育や指導という苦手なことを頼まれ、うつ状態を発症した。その後の治療も何処でもうまく行かず、先生(筆者)に出会って、やっとうつ状態を癒した。その後の治療も何処でも、とここまで来れた、ということであった。でも、希死念慮だけはしつこく続いている。

**【第七期、44～50回、告白の後のやりとり】(X+1年10～12月)**

セラピストは余りの大変さに圧倒され茫然としたが、まずはAの告白の勇氣と労をねぎらった後、今の気分を聞くと「やっとうつ重い荷物が取れたが、一方で大変なことを漏らしてしまっ、後悔の気持ちの方が大きい」と言う。そこで(これだけの重荷を一人で引き受け、よくここまで生きて来た。何か奇跡のような気がする)と言うと、Aの目には涙があふれた。そして(秘密を持ち続けるのも辛い、告白するともっと辛いですね)と続けた。Aは「こんな私は生きていても仕方がない。死ぬことだけが唯一の希望」と言うので(そのような気持ちに分かるというのはおこがましいので言いませんが、貴女の苦しさと、辛さ、恥ずかしさ、悔しさが伝わってきます)と伝え、さらに大きく泣きだした。ひとしきり涙を流した後、(秘密を持ち続けるのは大変貴重で大事なことです、重荷を少しでも引き受けてもらおう人がいたら、秘密を保ちやすと思います)と述べると、Aは「先生がそれを引き受けてくれるんですか」と返したので(私であれば引き受けます)と言うと、再び涙を流して後は話にならずに泣くばかりであった。セラピストも思わず目頭が熱くなった。この後「もう先生だけが頼り。先生がいるのでやっとうつと生かされる。先生とずっといたい」という恋愛性転移というものが生じ、セラピストの側にもそれに相応する逆転移感情が湧いたが、Aのその気持ちに対する感謝とそれを尊重すること、治療関係の枠を守らざるを得ない辛さを

## 【第十期、82～93回、薬を巡って】(X+2年9～12月)

無事に結婚した後、薬の中止希望から薬についての話し合い。薬が冷静さや安定を維持する補助になるという「薬の魂」という考え方を理解し、服薬への抵抗・恐怖が弱まると却って減薬・中止可能になる。

## 【第十一期、94～105回、夫婦生活のトラブルを巡って】(X+3年1～3月)

この後順調にみえたが、Aの他責傾向、投影同一視(神秘的融却)(Jung, 1931/1970)傾向が強く、夫との間でトラブルが生じたりしたので、夫婦合同面談も取り入れたところ、互いに相手の立場に立ち、「相手に言って欲しくないこと、して欲しくないこと、して欲しいこと、して欲しいことを基本にしたところ、何回もの波風はあるが、上手く収まる。

## 【第十二期、診察のみの十二年間、妊娠・出産・

## 育児、実母の愛の発見、被害妄想、近親相姦願望】

その後妊娠して、出産育児不安が生じたが、無事に健康な男児を出産。育児に関しては心配したが、実母が助けに来てくれ、孫を可愛がってくれるので、Aは「母にこんな優しい面があったのか」と感心。その後もママ友との間で被害妄想的になったが、それは放っておけた。小学校に上がった後、子供と入浴中急に子供への性愛願望が生じ、「やはり私には悪い血が流れている」との心配を訴えたが、神話等の例を引いて話し合うと、近親相姦願望は誰にでもあると安心する。そして「今まで叔父に性的な悪戯をされたかと思ひ込んでいたが、遊んでふざけていただけだったのかも知れない。私の空想かしら」と言う。(真相を追求する方がいいかどうか)聞くと、「今になったらどちらでもいい」とのこと。そして、初診から14年で遠くへ引っ越し、一応の終了。Aは「前とは反対に、今は生きていてよかったですと思う」とのこと。(X+14年、終了)

## 4 考察

### ① 基本的治療姿勢(境界例治療に対する)

(治療の主目標と重要点) 筆者は常に治療実践だけを考えている(辻, 2008)ので、夢の治療的意義は認めつつも夢分析を第一目的にしていく訳ではない。また、ユングの治療の四段階(告白、解明・分析、教育、変容)(Jung, 1931/1970)には賛成であり、四つのポイントとしている。また、治療目標に関しても、ユングの挙げた九つの点(Jung, 1944/1976)は有益な指針である。さらに治療とは自己実現(Jung, 1928/1982)を目指すという基本方針であるが、自己実現は河合隼雄(1991)が「自分の自己実現程他者にとって迷惑なものはない」と言うように、筆者は自己実現だけでなく他者実現も目標にしている。さらに神経症の治療で、

過去の分析より現在が肝心というユングの主張(Jung, 1913)はその通りである。今ここで現在のその瞬間に過去も未来もその現在も全て集約される。

(構造枠と器) 境界例に限らず、治療の開始には約束が必要である。治療で何が起きるかわからないので、共同作業・共同責任の確認、治療目標、自傷他害の禁止、ルール設定という枠は必要である。ただ、境界例にあつてはこれに反発する場合が多く、それに対して徹底的に話し合う必要がある。契約が成立しない限りは心理療法を開始しない方がいい。水に器が必要であるように、心理療法にも構造枠が必要である。「毒消しの器」「心の臍取りの容器」になるには、

構造枠という器が必要なのである。もちろん枠に固執することなく相手との波長合わせ・柔軟な構造枠も大事である。

(低負荷質問の工夫) 境界例は、想像力、熟考力、傾聴力、正確な表現力が乏しく、対話が苦手なため、情報が乏しく、セラピストは困惑することが多い。それでいきおい質問せざるを得なくなるが、これにも猛反発が生じる。特に〈どう思いますか〉という質問は相当負担で不快なようで、クライアントの精神状態を不安定にさせる。そこで、筆者は低負荷質問を試みている(注2を参照)。まず、①質問していいかどうかの承諾を得る、②ふわり質問(「何か浮かんでききますか」的聞き方)、③羽衣質問(さっと表面を撫でるだけの質問)、④選択肢型質問、⑤暗示的にならないよう注意、⑥波長合わせ

## ② 本事例の考察

(Aの特徴、見立て) Aは全体を通して見ると、境界例という見立てになるし、PTSDの合併も考えられる。ただ、高度な知性と物質的にはやや恵まれた環境にあり、かろうじて適応してきた。硬いペルソナがあり、解離の機制に助けられ不快な情報にはなるべく接しないようにできているのだろう。しかし、両親との間に基本的信頼感が成立せず、頼りにしていた叔父からもひどい裏切りがあった。そのことで否定的アニムスが強固に形成され、人間不信・自己不信に陥ったと思われる。これらは記憶の底にしまい込み、ひたすらピアノと英語に打ち込み、ごく狭い対人関係の中で適応しようとしていた。ただ、否定的アニムスと結びつく影は絶えず彼女を刺激し、希死念慮という形で繰り返し現れてきた。だが、ここでも軽い自傷や過食等でその場凌ぎの対応をしてきた。また、いくら男性を拒否しても、湧き上がる性的リビドーや世間並みに男性と付き合いたいという衝動のもとに、かなり無茶な交際をして失敗する。彼女はアマゾネス元型(Guggenbühl-Craig, 1979/1982)

せ(相手が質問を受け入れられる状態かどうかに注意する)といったことである。これにより、セラピストへの警戒感や怒りは少し薄められ、答えやすくなり、情報が集まりやすくなる。その結果、適切な対応ができ、さらに質問しやすくなったり、相手の想像力の開発が成されるという良循環に移行しやすい。

(行動記録の活用) 第三、四期で行動記録を使っているが、境界例治療では重要で、これにより自分をチェックし、自分の内面に向かわせることになり、自分の感情と行動のコントロールだけでなく、内面の想像力に刺激を与え、その開発を助ける。弁証法的行動療法を唱えるLinehan, M.も、この行動記録を使って、感情と行動のコントロール力を高めようとしている(永田, 2007)。

というものに支配され、男性を簡単に手に入れ支配できると思い込んでいた。ただ、その空想的試みが挫折すると同時に、仕事の重荷もあって、うつ状態を発症し臨床的事態となった。思春期からアマゾネス空想に耽ることが多かったが、現実には厳しかった。

(前半の治療過程。第一〜三期) 治療は最初から困難に満ちていた。ただ、治療契約という器がかろうじて出来たのはよかった。特に、治療目標を何とか設定したのが大きい。Giegerich (2013) が「心理療法の目的はクライアアントが何を望んでいるかを明確にする事である」と言っているが、同感である。さらに、怒りのとめどもない排出、対話の困難、想像力の乏しさに対して、低負荷質問を使い、少し警戒感が緩み、希望を持ち始めた可能性がある。また、行動記録を使って少し感情のコントロールができ、内面に目を向けられたのもよかった。想像力の開発準備もできたのだろう。また、対話だけでは進まないため、夢利用を提案したが、セラピストは別に夢が利用できなくてもいいと思ってい

た。このように、こちらが夢に執着していないことも安心感を与えたのだろう。さらに堂々巡りが続いているが、Jung (1944/1976) が、周回運動 (閉じた円の周りをぐるぐる回る運動) を重視したように、このマンダラの周辺を二人して回ることに意義があったのかもしれない。この堂々巡りという円周運動に付き合ってもらうことで、両者が生き残られた。

(水の夢) Aが六つの夢を報告したのは治療の転機であった。この時は、共同作業の夢ヴァージョンとしての共同連想を使った。Aは想像力の貧困さがあり、夢を表現するのも治療者の助けを借りてやっとな報告したが、連想となると全く湧いてこなかった。ここでセラピストに〈自分の連想を言ってみましょうか〉という気持ちで自然に湧いたので、それを口にし、結果的には本人の想像力の開発に繋がったが、ここではユングの弁証法的対話 (Jung, 1935/1989) を念頭に共同連想を試みた。この時の連想の伝え方は、低負荷質問のようにふわりと投げかけ、さらにセラピストの連想について何か浮かんでくるか、そっと聞いてみるといったものである。ここで大事なことは、セラピストの連想は、決定的ではなく勝手に思いついただけのものということを説明しておくことである。また、正しい夢の解釈として「クライアントの心が納得し、役に立ち、事実に合わせているもの」という考え方を説明した。それと、なるべく一人で到達する方がいいが、それが難しい場合はセラピストの連想をヒントにしなから、自分自身の腑に落ちる解釈を探っていくのがよい、とも伝えた。こうして想像力の開発を目指した。水溜まりの夢について、Aは何も連想が湧かないというが、セラピストには色んな連想が湧き、それを整理して事例に記載しているような連想を伝えるといった具合である。しかし、夢の危険性についてももっと強く伝えるべきだったと思われる。

第二の砂漠の夢だが、まず飛行機に乗るのは、今の辛い日常生活からの脱出と上昇願望、楽園到達願望があるが、残念ながら砂漠に落とされ

る。彼女の今の現実の辛い面に戻される。ただ、Aだけが助かっているということとは、それなりAの強さや自信の表れだろう。しかし、必要な水が無いというのは自分の心が砂漠のようで、水といった潤いが全くないということだろう。ただ、隊商の行列を遠くに見るのは少しの救いを求めているのかもしれない。Kast (1986/1992) は、「夢が自らの活動の場としても砂漠を選ぶとすれば、その夢はいつもとても重要で、全く特別な実存的状态を示しています」と述べているが、ここでのAが自分の内的世界を砂漠というように正直に表現し、水 (生命力、感情、繋がり等) を欲している、という連想をセラピストに与えたのは、この事例の一つの救いだろう。共同連想でAは何も浮かばなかったというが、硬いペルソナが水の浸透で少しずつ緩みだしたかもしれない。

第三の夢では、Aのその願いは、木々と緑の草原に出会うことで少し聞き届けられた。Hark (1987/1992) が「木は内面的な根こそぎ状態を防いでくれ自己発見と自己実現のきっかけを与えてくれる」と記すように、少し前進している。木や草が水分を含み青々している所は彼女の安らぎの場所なのだろう。それで元氣を得たのか、Aは草原を飛び回る。しかしまもなく川岸に辿り着く。ここでの川は現実社会かもしれないし、自分の鏡かもしれないし、洗礼の場所、即ち死と再生の場所かもしれない。ここで裸になり、水に映る自分の姿を眺められ、水浴びをすることで、穢れた自分が死に、生き生きとして清らかな自分が生まれ変わるかもしれないが、本人は水に入ることを恐れ、引いてしまう。まだ準備が整っていないのかもしれない。ただ、共同連想で少し自分の思いを言えている。

第四の水源探求の夢では、自分からというより誰かに引っ張られている感じである。水源を探るとは、自分の苦しみの原因を知りたいだけでなく、自己そのものの探究意欲もあるのだろう。しかし、上流に行くとも川幅は狭くなるのに、何故か広がっている。これは現実の苦しきや自

分の無意識はとつてもなく広大なものだけだということを示しているのだろう。

水源探求は結局、海というとつてもなく広大な水の領域に連れて行く。そして第五の夢で現れたのが、アマゾネス軍団である。アマゾネスは軍神アーレスとニンフのハルモニア（アフロディーテの娘）を祖としている（高津，1967）。アマゾネスは男と交わるが、女の子が生まれた時は育て、男の子が生まれたら殺すか不具にさせ、女の子のみを育てる。また、交わった男を殺してしまう。総じて強くて美人で賢くて男性を支配して対等な人物として寄せ付けないうような傾向を持っている。即ち、アフロディーテ（美）、アテネ（力と知性）、アルテミス（処女性、男性拒否）の三女神を合わせたような存在と言える。このアマゾネス元型（Guggenbühl-Craig, 1979/1982）は、Aが思春期の初めから長年秘かに憧れていたもので、自分の美や知性が常に称賛され、男性との恋愛といった面倒くさいことをせず、男を道具として利用し支配できる、無意識的空想の中での理想の女神であった。ただ、彼女はそうしたアマゾネスにはなれずに溺れそうになる。これは彼女にとつては大変なショックであったであろう。自分はアマゾネスのような生き方しかできないのではないかと無意識的に思っていたのが、夢の中に登場し、しかもそこへの参入も拒否され、自分は溺れ死ぬしかないと思いついたのだのも無理はなかった。そして自殺未遂へと行きかけた。このように、想像力・連想力の乏しいクライアントに連想が浮かんだ場合、その連想の衝撃は強く不適切な行為を起させることがあるので注意すべきである。次の共同連想までもち堪えられず、直接本人の無意識を刺激し、行動化に走らせたのであろう。夢分析の怖さを感じさせられた。

また、このアマゾネス元型が現れたのは、夢が自分の本質の探究へと進んだこと、彼女の思い込み、急ぎ過ぎが夢にも影響した可能性がある。

続いての第六の夢は、何か浦島太郎を連想さ

せるが、亀が出てきたのは、一つの救いである。亀は非常に多義的な象徴（宇宙、大地の安定性、全体性、最高神、原初の海、再生、月神、大地母神、世界の支え、天地の仲介者、老賢者、生命力、長寿等）を持つが、概ね肯定的なものである。Jung（1944/1976）も「大亀の背に乗る神々しく輝く海の乙女達」という『ファウスト』の詩句を引用し、亀が無意識の本能的要素を象徴するとしており、亀が錬金術の器具の一つであることを紹介している。筆者は、亀はクライアント自身であり、傷ついて動きのとれない自分自身を助けているように思える。そして、助けられた小亀は、希望を指して前進するのを援助する大亀（自分の中の大いなる存在）に変容する。また、Jung（1917/1926/1943/1977）や Meier（1975/1989）も述べているように、渡河は大きな決断であるが、大亀の助けで実現しうになる。しかし途中で「自力で行け」と自立を促すのは興味深い。ここでは亀や渡河を通して傷ついている自己だけでなく、助ける自己、助けられる自己、決断を援助する自己、自立を促す自己等、多数の自己が混雑し合いながら、次の世界へと進んでいくことを示している。そして告白の葛藤が浮かぶ。

そして告白がなされた時、セラピストはできれば安らかな状態で秘密を維持できることも祈っていた。さらに、言うか言わないかで迷うことと自体が心の成熟に繋がると思っていたので、どうなるか見守る気持ちであったが、告白の条件や告白後のことについて話し合うことは重要だと思っていたので、それは共同討議した。このように、最良・最悪の結果という質問をそつと入れながら、本人の予知能力を開発し、告白するしないの葛藤を味わってもらおうことで、本人の心の強化を狙ったのも良かったと思われる。結果的には告白の方を選んだが、もし本人の力が告白前の話し合いで強化されたとしたら、無理に告白しなくてもいいと考えている。いずれにせよ、告白することや告白の内容より、それを廻って本人の自己（セルフ）が豊かで強く柔

軟になり、全体性を回復することが重要なのである。告白の内容は予想したように大変なものであった。本人はこれを語りながら、涙し混乱し説明も切れ切れで前後が不明になったりして、セラピストが少しずつ羽衣質問で明確に、要約するという形で進んだ。内容は、父母の養育不足→基本的信頼感の形成不全→代理親としての叔父との愛着関係→叔父の裏切り、深刻な性的外傷体験→引きこもりと性の拒否→苦しい中で卒死念慮、行動化（自傷行為）→苦しい中で卒業と就職→二度の失恋→重症うつ病発症→各治療者にかかっても改善せず、という苦しさや傷の歴史であったが、英語とピアノが生きがいであったのはよかった。メロデューは水の流れるように癒しの効果を持つ。

そして転移・逆転移 (Jung, 1946/1994) も乗り越えられた。この転移・逆転移は、重大過ぎる秘密を共有し、しかも女性クライアントと男性セラピストの間であるから起きても不思議ではない。まずは夢の共同連想までで既に転移・逆転移が起きていたが、告白によってそれは余計強くなった。セラピストはここで「それは価値あることで、恥ずかしいことでも何でもない」と評価し、「恋愛感情を持ちながら現実には治療者・患者関係を守ればいいよ」と淡々とした態度でいたので、セラピストへの転移はそう強くならずに秘密を持ちながら他の年齢的に相応しい男性へと彼女のリビドーが向かったと思われ。セラピストがここで大袈裟にするのと、恋愛性転移感情は深まる可能性があるので注意しておきたい。

深刻な心的外傷を持つ例では、告白だけで改善しない場合が多いが、Aが比較的早く回復したのは、①Aの秘密をずっと保つ能力が強かった、②告白する前に十分に悩み考え抜いた、③セラピストが告白より本人の心の成熟を願っていた、④告白の結果、影の部分が明確になった、⑤告白した後、セラピストに受け入れられたと感じた、⑥その後の転移・逆転移は自然だが、現実を見ることができた、といったことが大き

い。告白には薄っぺらな軽い告白から、このように質の高い重い告白まで様々な段階があり、各々に適切な対応が必要である。

(治療の後半 第七～十二期 最終まで) この後は、現実に向かい、恋愛、性的問題、結婚生活等様々なことがあったが、その都度共同探求によりAの想像力を引き出し、乗り越えた。また、脇役としての薬については、自分の役に立つ「万能の霊液」(Jung, 1944/1976) のような物と考えてくれたのも良かった。Giegerich (2013) は薬の使用に否定的なようだが、筆者は上手く使えば想像力の開発に繋がる、という臨床的実感を持っている。また、結婚は幸せばかりではない。Guggenbühl-Craig (1979/1982) が「あらゆる救済論的な道と同様に、結婚も困難で苦痛に満ちている。……結婚とはそもそも快適でも調和的でもなく、愛と拒絶を持って相手にぶつかり、自分自身と、世界、善、悪、高み、深さを知ることと学ぶ個性化の道なのである」と記しているように、厳しい道なのである。Aもその結婚生活の現実にぶつかったが、やはり彼を交えての共同探求で乗り越えたようである。個性化・自己実現 (Jung, 1951/1990) (他性化・他者実現でもある) を育むきっかけを作ったのは良かった。また、母の愛の再発見、近親相姦願望の自覚、性的外傷体験が空想だったかもしれないという連想は、いずれもAの心の領域を広げ、全体性という自己実現を助けた。性的外傷が事実かどうかということは、本人が問題にしない限り取り上げなくてもいいだろう。心的現実の大事さを尊重したい。

## 最後に

この壮絶な人生と治療過程に対して付け加えることはないが、あえて言うとしたら、やはり治療は「隠された物語」や神話の発見ということであろう。

(事例はプライバシーを守るため、治療的真實を損なわない程度に、少し改変の配慮を加えている。また、論文掲載に関してクリエイティブな

## 注

- 1 クライアントの連想を重視するが、疑問に思う点はセラピストも質問して、両者が納得するまで話し合う。クライアントの連想が浮かばない場合は、クライアントが望んでいれば、セラピストの連想を伝えてそれを刺激してもらい、クライアントの連想を聞き、これも両者が一致するまで話し合う。セラピストの連想は一つではなく幾つか挙げ、「全くの私の勝手な連想ですので捉われないよう」と前置きし、できるだけクライアントそのものの連想を引き出すよう気を付ける。暗示的になるのは避ける。夢の相互スキュークル版である。
- 2 質問は多くの場合、クライアントに負担をかける。それでいくらかでも負担を軽くするよう「ふわり質問」(ゆっくり静かな口調でふわっと質問を投げかける。クライアントそのものではなく、クライアントとセラピストを包む超越者に語り掛けるような独り言的質問)、「羽衣質問」(いきなり核心に入らず表面を撫でるつもりで質問を發し、様子を見ていく)、選択肢型質問(クライアントは、オープン・クエスチョンよりこちらの方が答えやすい)といった低(軽)負荷質問(柔らかな質問)を試みた。時には、「負担をかけて申し訳ないけど、治療のためにはどうしても質問せざるを得ないがいいですか」と断りを入れる場合がある。
- 3 夢の表題はクライアントと筆者の合意の上つけた。

## 文献

- Anderten, K. (1986). *Traumbild Wasser: Von der Dynamik unserer Psyche*. Olten: Walter. (渡辺学 (訳) (1992). 水の夢——心のダイナミズムについて 春秋社 p.1.)
- Bachelard, G. (1942). *L'eau et les rêves: Essai sur l'imagination de la matière*. Paris: José Corti. (小浜俊郎・桜木泰行 (訳) (1969). 水と夢——物質の想像力についての試論 国文社)
- Giegerich, W. (著) 河合俊雄 (編著) 田中康裕 (編) (2013). ギーゲリツと夢セミナー 創元社 p.45, p.49.
- Goethe, J. W. (1808). *Fausi..* (相良守峰 (訳) (1958). フォウスト (第二部) 岩波文庫 (8170, 1行))
- Guggenbühl-Craig, A. (1979). *Die Ehe ist tot-Lang lebe die Ehe*. Daimon Reihe: Schweizer Spiegel. (樋口和彦・武田教道 (訳) (1982). 結婚の深層 創元社 p.74.)
- Hack, H. (1987). *Traumbild Baum: vom Wurzelgrund der Seele*. Olten: Walter. (渡辺学 (訳) (1992). 木の夢——魂の根底について 春秋社 p.21.)
- Hack, H. (1992). はじめに カリン・アンデルセン (著) 渡辺学 (訳) (1992). 水の夢——心のダイナミズムについて 春秋社 p.3.
- 平井孝男 (2008). 難事例と絶望感の治療ポイント 創元社 p.3.
- 平井孝男 (2014). 心理療法の下ごしらえ——患者の力の引き出し学 星和書店 pp.127-132.
- Jung, C. G. (1911-12/1956). *Symbols of Transformation*. CW5. Princeton, NJ: Princeton University Press. (野村美紀子 (訳) (1985). 変容の象徴——精神分裂病の前駆症状 筑摩書房)
- Jung, C. G. (1913). *The Theory of Psychoanalysis*. CW4, par.375. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Jung, C. G. (1917/1926/1943). *On the Psychology of the Unconscious*. CW7, par.132. Princeton, NJ: Princeton University Press. (高橋義孝 (訳) (1977). 無意識の心理 人文書院)
- Jung, C. G. (1928). *The Relation between the Ego and the Unconscious*. CW7, par.218. Princeton, NJ: Princeton University Press. (野田卓 (訳) (1982). 自我と無意識の関係 人文書院)
- Jung, C. G. (1931). *Problems of Modern Psychotherapy*. CW16, par.122. Princeton, NJ: Princeton University Press. (高橋義孝 (訳) (1970). 近代精神治療学の諸問題 ユング著作集2 現代人のたまたしい p.7.)
- Jung, C. G. (1935). *Principles of Practical Psychotherapy*. CW16, par.9. Princeton, NJ: Princeton University Press. (林道義 (訳) (1989). 心理療法論 みすず書房)
- Jung, C. G. (1944). *Psychology and Alchemy*. CW12. Princeton, NJ: Princeton University Press. (池田紘一・鎌田道生 (訳) (1976). 心理学と錬金術I・II 人文書院)
- Jung, C. G. (1946). *The Psychology of Transference*. CW16. Princeton, NJ: Princeton University Press. (林道義・磯上

- 惠子 (共訳) (1994). 転移の心理学 みずす書房
- Jung, C. G. (1951). *Aion. CW9/ II*, par.376. Princeton, NJ: Princeton University Press. (野田卓 (訳) (1990). アイオン 人文書院 p.265.)
  - Jung, C. G. (1955-56). *Mysterium Coniunctionis. CW14*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (池田紘一 (訳) (1995・2000). 結合の神秘I・II 人文書院)
  - Jung, C. G. (1961). *Erinnerungen, Träume und Gedanken*. Olten: Walter, p.14.
  - Kast, V. (1986). *Traumbild Wüste: Von Grenzerfahrungen unseres Lebens*. Olten: Walter. (渡辺学 (訳) (1992). 砂漠の夢——生の限界経験について 春秋社)
  - 河合隼雄 (1991). 私信 (1991年6月)
  - 高津春繁 (1967). ギリシア・ローマ神話辞典 岩波書店
  - Meier, C. A. (1975). *Die Bedeutung des Traumes*. Olten: Walter. (河合隼雄 (監修) 河合俊雄 (訳) (1989). 夢の意味 創元社)
  - 永田利彦 (2007). 弁証法的行動療法 (DBT) の登場とその衝撃——日本での実践への壁 こころのりんしよ う à la carte, 26 (4), 572-583.
  - 織田尚生 (2017). 心理療法の想像力 論創社
  - Schwartz-Salant, N. (1989). *The Borderline Personality: Vision and Healing*. Wilmette, IL: Chiron Publications. (織田尚生 (監訳) (1997). 境界例と想像力——現代分析心理学の技法 金剛出版)
  - 高橋順次郎 (編) (1988). 大正新脩大藏経 第9巻 華嚴経 大藏出版 p.278.
  - 辻悟 (2008). 治療精神医学の実践——こころのホームとアウェイ 創元社 p.3.

(2019年3月22日受稿 2020年6月28日受理)